大学回想録「ワンゲルとゴキブリ」

文理学部 41 年卒　加 藤 征 治

これはもはや歩くシーラカンスとなった一人の「大学ワンゲル OB」の思い出話である。振り返れば慌ただしく過ぎ去った若き日々のこと、それを”青春“と呼べば、誰もがそうであるように、複雑・多感な思いである。タイトルの「ワンゲル」はワンダーフォーゲル（WV、渡り鳥）部活動、「ゴキブリ」は建物の隅や台所などに出回われ嫌われ者としてよく知られているあのアブラムシである。話は筆者の大学 WV 部活動と卒論研究（学士論文）のゴキブリ（実験動物）のことである。

大学を卒業（1966、昭和 41 年）後、山口大学では近郊に点在する各学部の平川地区（吉田キャンパス）への大規模な統合移転があり、筆者の学んだ文理学部（理学科）もその後理学部と人文学部へ改組された。あれから既に 55 年の歳月が経過するが、先年新しく改革・発展してきた山口大学を訪問する機会があった。すっかり変容した筆者にとって新しいキャンパスを散策中、運動部部室棟に WV 部室を見つけた。たまたま誰も居ない空いたままの散乱した WV 部室を覗き、昔とあまりにも変わらぬその風景とあのワンゲルの匂い（臭い）が懐かしくて時間が止まったようであった。そこにしばらく佇んで、４年間の部活動フィ

図１ WV創部初めての夏合宿
能登半島を歩く(1962/8/24-9/1)

上左：黙々と夏の能登半島を
ワンデラーは行く

上右：21名全員無事最終地能登半島
禄郷崎の灯台に無事集合

下：『兵士の靴よりも、世界を
ワンデリングする靴の方が強い』
（シュルマン）

ルムが数分で回るのは、陳腐な表現ではあるが、まさに“走馬灯”のようであった。すべてを書けば原稿が終ってしまう。

１年次（1962）の創部初めての能登半島巡りの夏合宿（図１）のこと、微力ながら３年次 WV 執行部（主将）を務め、部活動を模索しながらも体育会加入活動も既に確固たるものになっていったこと（WV あるきの記第２号、1966/2）、その真夏の四国連峰（石鎚山・剣山系）縦走の山行・夏合宿（1964）（図２）など、いろいろな活動風景が思い起こされた。

図２　四国石鎚山―明石山系夏合宿
1964(昭和39年)

上左：四国の霊峰石鎚山を望む

上右：石鎚連峰堂の森
“馬の背を分ける”尾根の風景

下：天狗岳頂上（Aパーティー）

とくに印象的なことは、その四国連峰夏合宿の約 2 週間前に、専攻の生物学教室の 3 年次恒例の１週間の臨海実習（光・室積海岸）があり、その時海岸で膝頭の裂傷事故を起こしたことである。臨海実習での長い顕微鏡観察（ウニの発生実験）の合間、先生の目を盗んで海岸でのお遊び（水泳）が過ぎて、牡蠣殻で膝頭を切ってしまった。幸い出血の割に傷は深手に至らず、直ちに地元の外科医で膝蓋部の皮膚縫合処置を受け、山口に帰った。その年の夏合宿は、ちょうど筆者の学年の新執行部の企画でもあり、どうしてもこの WV 夏合宿計画を成功させたいという熱い思いで、サポーター保持の状態で無謀と言える約１週間の合宿山行に臨んだ。幸いなんとか大事に至らなかったのは“山の神のご加護！”か、臨海実習参加の学友たちのあたたかい緊急介護や、事情を知る同山行パー

テイ（石鎚山系縦走）の仲間たちの配慮・支援によるものであり、幸運だったと感謝に耐えない。

話は「ゴキブリ」に遷る。一般に医学・生物学系の研究では分野によってさまざまな実験動物を扱うが、筆者の卒論研究「神経細胞のゴルジ体[1)]」では、当時としては珍しくゴキブリを用いた。大学の生物学研究室では欠員があって３年次より研究室入りした際、指導教官（当時助教授）から研究テーマを提案され、実験材料にゴキブリを扱うことになった。「さあ―大変！」、真っ先にゴキブリをどう確保するかを思案した。取り合えず適当な木箱に釘を打ち立てニクロム線を張って通電し、適当に湿りけを与えて初めてゴキブリ巣箱なるものを作った。トウモロコシを餌にしたその巣箱は適度に温かく、彼らにとっては快適な別荘“ゴキブリ館”であった。その“館”の中には、ゴキブリ嫌いの人にはその状況を想像するだけで不快であろうが、当初研究棟・倉庫などで採取したゴキブリとその卵（正確には卵鞘）がウヨウヨ集まっていた。それは僅かながら実験動物の定義に従い、「飼育・管理したもの」のつもりであった。ところが、夏が過ぎ、そろそろ秋風が吹き始め、卒論もいよいよ佳境に入る頃、既にその“館”には僅か２～３匹しか残って居ない状況となっていた。それに気付いた筆者は、「ゴキブリが居ないと卒業できない！」と愕然となった。今でもその時のことを鮮明に思い出すのである。手製の“館“に、夏にあれほどウヨウヨ居たゴキブリが急にいなくなったのは何故？その激減のほとんどは神経組織標本作成の犠牲[2)]が原因であるが、中には粗末なその“館”からの幸運な脱走兵もいたのである。

筆者がゴキブリの居ない“ゴキブリ館”を眺め、卒論完成を案じて一人ため息をついていたある秋の日、大学で研究室の先輩に出会った。その先輩は卒業後数年間、教職現場で多忙な日々にも拘わらず大学に通い卒論研究（植物のゴルジ体）を続けている“卒論生の鏡”のような人であった。その先輩との話の中で、「この時期、どこかにゴキブリは居ないものか？」と思い切って相談した。帰ってきた言葉が「夕暮れ時、近所の農家の牛小屋（壁）を探せ！」という有難い助言であった。早速寒くならないうちにと、夕方一人で市内近隣の農家を訪ね回った。「ごめん下さい、牛小屋のゴキブリを採らせてください！」という筆者の申し出に、夕餉時、でてきたどこの家人達も驚き、「何されるんですか？」と不思議そうな顔であった。許可を得て裸電球の灯る牛小屋の土壁をめくると、ゴキブリが一斉に逃げ回る、こちらも彼らを追いかけ回った。そんなことを重ねているうちに、お陰でゴキブリ捕獲の達人となった[3)]。卒論テーマとは別に独自に密かに計画した神経切断・再生実験に必要なだけの数をも保することができた。このようなゴキブリの取り持つ先輩との出会い・その縁は後で述べるよ

うに、55 年後の今日に至り一生のものとなったのである。当時はそのことを知る由もなく、久しぶりに見るゴキブリがただうれしくて、その貴重な助言に対する感謝の言葉もそこそこに、頭の中はまさにゴキブリが這い回っていた。

話が少し専門的になるが、戦後、世界の電子顕微鏡の開発・発展により、細胞質内にあるゴルジ体（装置、物質合成）の研究は再び注目され、昭和 30 年代、筆者の卒論指導教官の研究論文も世界デビューし、活躍の歳月であった。それ故（？）同教官による歴代卒論生の卒論指導は熱のこもったものであった。ある時など、研究に行き詰まった筆者の前に、ゴキブリの頭部に小窓の穴をあけて観察した研究者（女性）の論文を示し、得々と私の神経節観察の技術的な未熟さと思考の不確かさを厳しく指摘された。厳しいと言えば、筆者が卒業後数年して、研究の道を歩みだした頃のある年、その恩師（教授）を訪ねた際、話が卒論研究談義となった。その時の話の一部を、ここに誤解を恐れず申すと、「卒論生と百姓は絞れば絞るほどよい！」と言う内容であり、その発言は近年ではまさに“パワハラ発言”となるものであった。懐かしい話と言えば、他に「1 引、2 運、3 学問」という含蓄のある言葉もあり、いずれも恩師の生涯忘れ得ぬ思い出である。

図３　半世紀ぶりに戻って来た筆者の卒業論文（1966/3 提出）とイラスト

年が明けた 1966 年 1 月も卒論実験であっと言う間に過ぎ、2 月の卒論提出期が迫り、ついに研究は時間切れとなった。一応まず表紙だけは完成したが、本文

の執筆完了は期限ぎりぎりとなった。卒論提出締め切りの日は早春の寒い朝であった。同学年の生物学専攻卒業生はＦ君(別研究室)と筆者の僅か２名のみであったので、二人で、完成したばかりの卒業論文（前ページ図３、幸運にも半世紀ぶりに感動の再会）を抱え、大学事務局に向かった。卒論提出の後、学生課からの帰りは二人とも無言であった。Ｆ君（大学メンネルコール合唱部所属）は微かに何かを口ずさんでいたようだが、故人となった今、その日のことを確かめるすべはなく、彼のテノールの美声ももう聞けない。さて、筆者はというと、「卒論を無事終え、これで大学生活はすべて終わった！」という高揚感と惜別で複雑な心境であった。ゴキブリに感謝することもなく、Ｆ君と別れた私の足は自然と当時経済学部の学生ホール内にあった古巣「WV 部室」に向かった。そこ

図４ 左上：合ワンの夕餉の風景　秋吉台(1963/6)　右：雪が無く、無茶苦茶明るい耐寒錬成風景 (1965/1)

左下：関西合ワンのテント村　広島八幡高原千丁原(1964/4)

には、我が WV 部の創部時期からそのまま４年間を過ごした筆者のもう１つの青春があり、後輩たちによる当 WV 部の第１黄金期の輝きがあった（図４）。

さて、ちょうど大学卒業を前に、将来の進路選択が問題であったが、たまたま幸運にも宇部市にある学園より教員採用の連絡を受けた。卒業式後淡々と山口より宇部に転出し、その学園に社会人一年生、駆け出しの教員として就任した。ただ若さだけが取り柄で、すべてが未経験・未熟のまま、教科・生徒指導に試行錯誤の日々であった。周りに迷惑ばかりかけながらの３年間の教師生活

は、自らの浅学菲才を思い知らされ、教育者としてのその後の長い人生の原点となったことは感謝に耐えない。私生活でも、学園の配慮により近くの内科医院（校医）さんの２階の居候となった。“名医付きの居候”（医院記念誌録）という傍若無人なこの居候、ご親切を享受して有難く 3 年間もお世話になった。今ではすべてのことが、汗顔の至りであるが、私にとってこの３年間程楽しく幸せな年月はなかったかと懐かしく思い出される。

大学卒業後の人生の大きな展開は、短い教員生活の後半にある。それは先のゴキブリが縁で尊敬する先輩に宇部の山口大学医学部・解剖学講座で再会したことに始まった。この時期、当時の先輩はすでに高校教員から医学部教官として転職し、教育・研究に活躍していた。筆者はと言うと、上述のように学園の教員生活に没頭し、ただ青春を突っ走っていたわけである。再会した先輩の配慮により、後輩も含め三人で週１回お互いの勤務後に医学原著・論文の抄読会を始めることとなった。まさに浅学菲才な学徒にとって“脳の栄養ドリンク“であった。時には夜になって昼の疲れで頭が朦朧となって、別のドリンクの酒盛りとなることも多かった。

不思議な「引き」・「運」で、３年間の教員生活を務め、さらなる大きな「引き」・「運」となって、奇しくも先輩の所属する同じ解剖学講座（恩師・教授）に教官（副手、後に助手）として採用され、転職した。それからは教育・研究一途、医学博士修得後、山口大学から新設（1978）の大分医科大学へ助教授として転出した。その後、同歴の先輩の背中を追い、オーストラリア（キャンベラ）、ジョン・カーチン医学研究所に留学（次ページ図５）し、帰国後約 10 年して医学部の人間生物学教室教授、続いて解剖学講座の教授に就任し、教育・研究に邁進してきた。

その後、私生活では不覚にも愛妻を約 10 年の闘病・介護の甲斐なく亡くしたことは痛恨の極みであり、今もって天国へ行って詫びねばならないという次第である。幸いにして二人の子供は無事巣立ち家庭を持ち、40 代となった現在、両人とも医療職にあり社会の一員として活動していることは、改めて先年の亡妻の 17 回忌に報告した。

大学人として研究室の片隅で、平凡なりともひたすら生涯を賭けて「学問」の道を歩み約 40 年、気がつけばいつの間にか退任（副学長）・退官の日を迎え、未だ志半ばにして大学を去ることとなった。その後、リンパ学（『リンパの科学』講談社 BB）をライフワークとして早いもので既に 14 年が経ち、傘寿を迎えた。まさに『仰ぎ見て遥か、顧みて一瞬！』の人生であり、現在に至ってもその道は果てしない。

図５
オーストラリア、
ジョン・カーチン
医学研究所留学
（1984～ 85）

上左：オーストラリア大陸地図
上右：公園で出迎えてくれたカンガルーと握手

下：国立植物園のレリーフ（国花と決して後すざりしないカンガルーとエミュー）

注１）　細胞生物学分野におけるゴルジ体（装置）の発見は、第６回（1906 年）ノーベル生理学・医学賞（ゴルジとカハールの共同受賞）で有名である。筆者も現職の頃、スウェーデン・ストックホルムのカロリンスカ医学研究所を訪問した際に、ノーベル記念館で歴代の受賞者の等身大パネル群の中にそれを見つけて感動した。

注２）　来る日も来る日もゴキブリを捕獲し、100 匹以上実験に用いた。大学卒業後、医学部の助手時代結婚して生まれた子供達（息子・娘）がまだ小さい頃（宇部在住）、大学の古い宿舎の部屋の隅や台所に出るゴキブリを見ると「ギャー」と身震いして異常に怖がった。二人とも。大人になった今でも、気持ち悪く大嫌いであるという。親の因果が子に移ったのか？今は、ただひとかたなくお世話になった彼らの冥福を祈ると共に、生きた化石とも言われるその逞しい生命力にあやかりたいと思う次第である。

注３）　筆者のゴキブリ捕獲は、ゴキブリが建物や家具に沿って進むという走行習性を利用しもので、部屋や建物の隅にメスシリンダーを置いてゴキブリを追い込むという単純な方法である。記憶のある方々も多いが、当時、家庭の台所などの

ゴキブリ駆除のための粘着剤が開発され、粘着テープやそれを応用した「ゴキブリ館、ゴキブリホイホイ」や、近年では「ジェットやコンバットスプレー」など捕獲・殺徐装置が作られ、人気商品としてよく売れている。今振り返れば、当時むつかしい神経細胞学など早々に諦めて、ゴキブリ捕獲名人として駆除のための捕獲方法・装置の開発による特許取得でも目指していれば、今は一躍財を成し、WV 部へ多少なりとも資金面での貢献ができたことかと妄想している。

追記：　生来の旅好きが高じて、ここ約 20 年もの間、世界遺産を巡る旅を続けて来た健脚は、各地に楽しい旅鳥の脚跡を残し、思い出は尽きない。しかし、2021 年新年を迎えた頃より、突然変形性股関節症が発症し、整形外科病院に通院・治療のかいなく、耐えがたい痛みとの戦いが数か月も続いた。幸い、医科大学時代（解剖学）の教え子となる当院整形外科医の画像診断により激痛の原因が明確となり、ついに人工股関節置換手術となった。手術決断に至るには不安も大きかったが、執刀医師の『緊張しますが、いつも通り手術させてもらいます』という真摯な力強い言葉に身を委ねた。まさに、幸せな“まな板の鯉”であり、感謝に耐えない。なお、本駄文は、術後の回復期・リハビリテーションの合間、梅雨の雨に光る紫陽花の花を眺め、暇を持て余す病室での回想録である。

（2021/6 記）